2009年10月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻253号
1985年6月28日第三種郵便物認可　ISSN 1343－4748

シャンティ
shanti

2009
秋
10月号

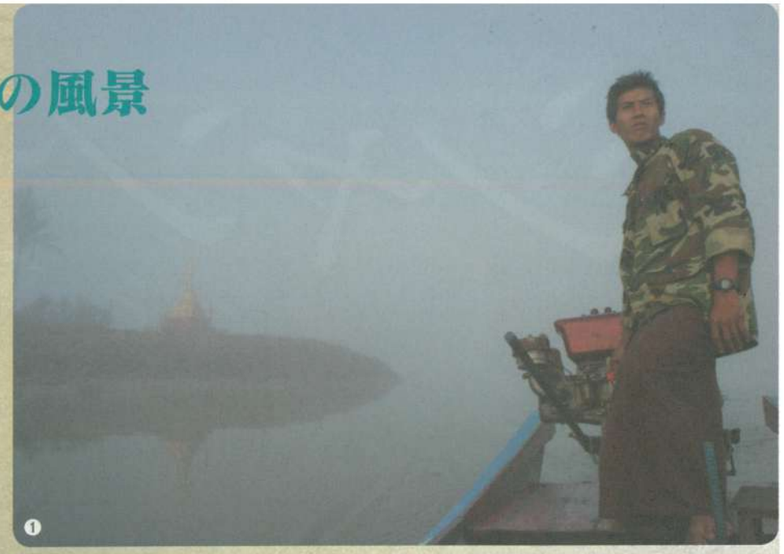
特集
民話絵本をつくろう

手を、とりあうこと。
私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。

社団法人 シャンティ国際ボランティア会

プロジェクトの風景

a Scene of Our Project



ミャンマー（ビルマ）サイクロン被災地支援事業〈村の保育所〉

首都ヤンゴンから車で12時間。河口の港町から小舟にゆられて3時間。ようやくミャンマー（ビルマ）南部の村に到着です。

SVAでは、巨大サイクロンで被災した村々の復興支援を昨年5月より行ってきました。1年以上経った今でも、押し寄せた海水の塩分が地中に残り、作物へ悪影響を及ぼしたり井戸が使えなくなるなど、村の生活は簡単には元通りになりません。

そんな中、明るさを取り戻しているのが「保育所」です。SVAは、サイクロンで壊れた村の保育所34棟を再建しました。ここには3歳から6歳の子どもたち40人ほどが通って来ます。絵本を読んでもらったり、歌ったり踊ったりと賑やかです。村から選ばれた先生が、子どもたちの世話をしているので、親は安心して漁や田畑に出られます。

弁当を食べた後は「お昼寝」。午後3時ころになると親たちが迎えにやってきます。子どもたちの明るい笑顔と声は大人たちを勇気づけ、村の復興も少しずつ進んでいるように感じました。

（緊急救援担当　白鳥孝太）

①朝もやの中、小舟で大河へ漕ぎ出す。
②舟の中で現地スタッフが絵本を読む。物語の確認や、主題について話し合う。
③村の保育所は、材料の調達が出来た後、村人も参加して再建された。
④読みきかせの時間、子どもたちは物語の世界にどんどん引き込まれていく。
⑤「また来てね！」帰る際には、村の「船着き場」まで、子どもたちが見送ってくれた。

「サイクロン・ナルギス」とは

2008年5月、ミャンマー（ビルマ）南部のデルタ地帯を襲ったサイクロン「ナルギス」は、強風とともに高波（高潮）を発生させて、人々や家、家畜や農作物などを流し去って村々を破壊しました。死者、行方不明者13万人を超える大災害となりました。

SVAの使命

私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ（平和）な社会の実現をはかります。

Cover Photo

表紙：タン・クロサン小学校の子ども楽団。お祝いの行事の踊り「チャイヤム」を披露してくれた。（カンボジア）
［撮影：チュア・バル（カンボジア事務所）］

巻頭言

道（みち）

難民問題と出会ってからの道のり

副会長　神津佳予子

難民問題を南北問題や食糧問題から論じている『人間の大地』（犬養道子著）の1ページ目に、アフガニスタン難民の子どもの写真が掲載されています。この本を1987年に読んだ時には、まさか自分が19年後の2006年にアフガニスタンを訪れるとは、夢にも思っていませんでした。

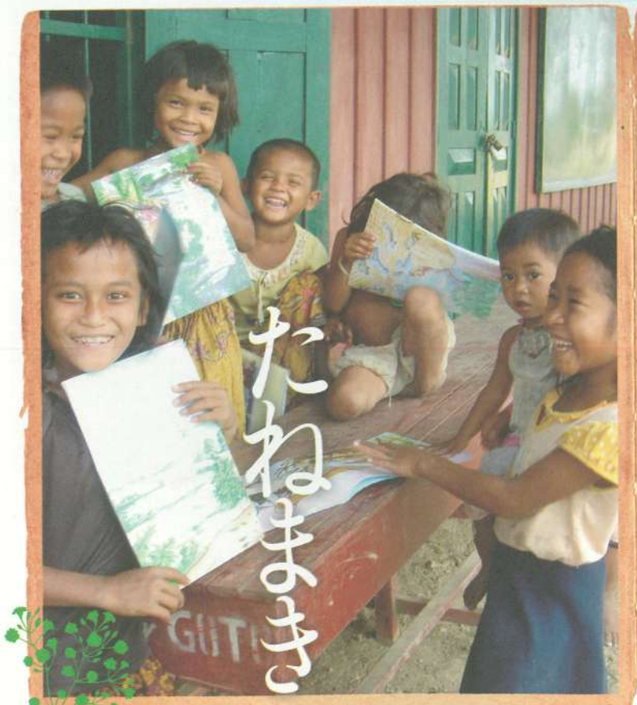
はじめて直接難民問題に触れ、SVAを知ることになったのは、22年前（1987年）の「インドシナ児童親善ホームステイ」でのこと。長野市で犬養道子さんの講演会が開催され、それをきっかけとして、日本に難民として来日し定住していたインドシナの子どもたちのホームステイ活動を、藤本幸邦老師（現在はSVA顧問）とともに長野市の我が家や友人の家庭で開催したのです。

当時の私は、夫の両親の介護や三人の息子たちの子育てに追われていた専業主婦。特に海外の問題に関心を持っていたわけではなかった私が、犬養さんのお話から、インドシナ難民問題は、どうやら日本の高度経済成長等とも密接な関係があるらしい……と気づかされたのです。そして、ホームステイに来たカンボジアの青年達との出会いは、タイ国内にあったカオイダン難民キャンプ、バンビナイ難民キャンプ、スラムと農村など、SVAの活動地へと私が訪れるきっかけになったのです。

「マイトリーしなの」という地域ボランティア団体を、長野の主婦や僧侶の方々と立ち上げ、まずはバンビナイ難民キャンプから運んできたモン族のクラフト販売からはじめて、長野の人たちに難民問題を知っていただくようにつとめました。

その時から変らずに「すべての子どもたちが、『生きるってこんなに素晴らしいことなんだ！』と実感できる世界になってほしい」との願いを込めて、母親の祈りの心でSVAに関わっています。

右から2人目が筆者



地球に絵本のタネをまく

vol.3

たねまき

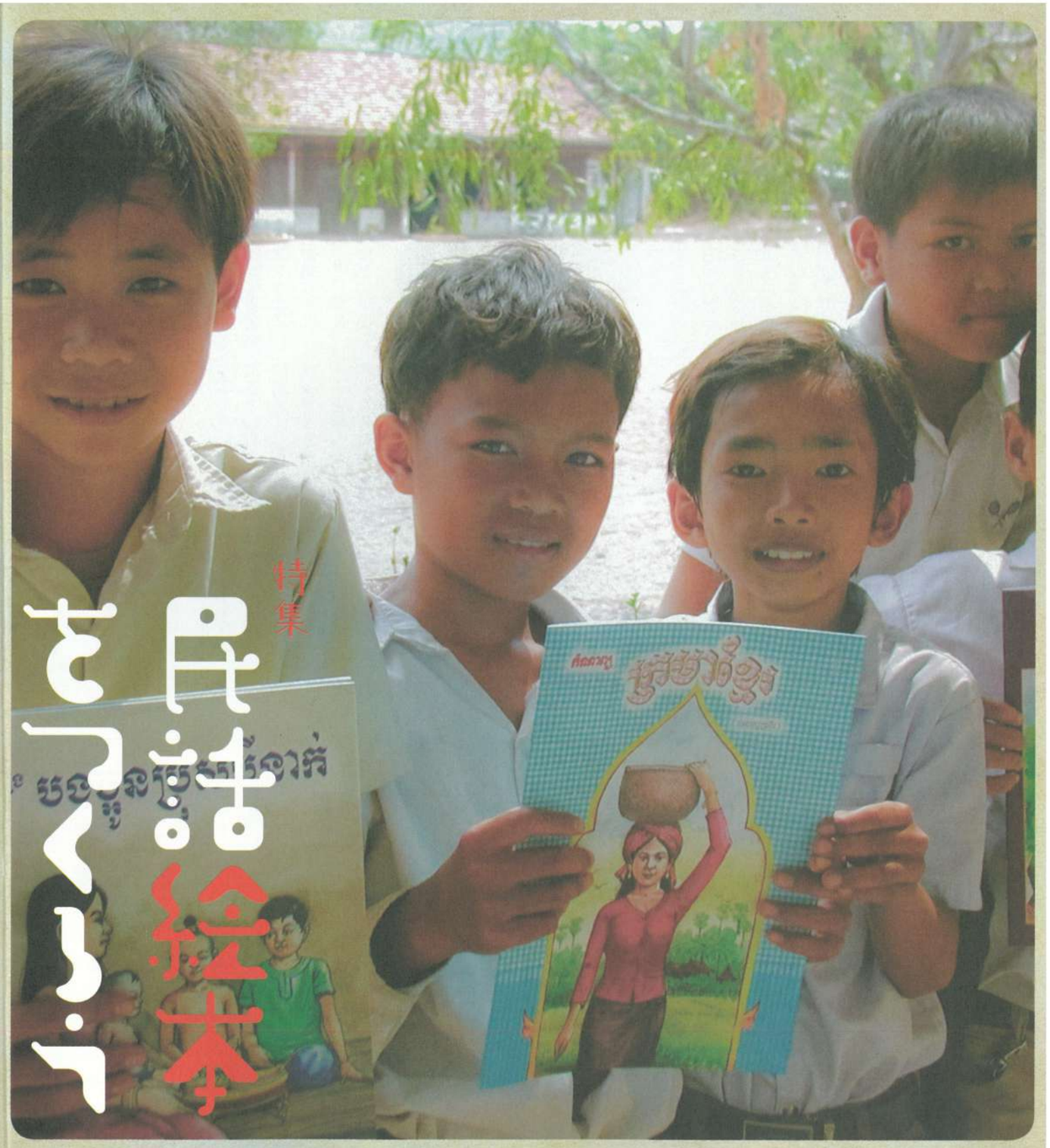
大地に咲く花も、最初は一粒のタネが運んでくれたもの。SVAが行うさまざまな教育・文化支援活動は「タネ」となってタイ、カンボジア、ラオス、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、アフガニスタンの子どもたちのところに届けられます。

SVAは図書館活動、学校建設、奨学金、学生寮運営などを行っています。図書館活動はさらに小さいタネに分かれ、絵本・紙芝居の出版、移動図書館、常設図書館の運営、伝統文化継承のための伝統舞踊や音楽教室になります。

大切なのはその土地にあったタネを選び、届けることです。あわないタネを植えても、枯れてしまうように、どれだけ時間とお金をつぎ込んでも対象地域の状況にあったものでなければうまくいきません。そのために活動を行う前からその地域の情報、教育状況、土地の人の思いを聞き取り、ていねいに活動を選んでいます。

タネを植えても育てなければ芽はでません。次号では芽の育てかたについてお伝えします。

特集 民話絵本でくらべて



出版された絵本を手に（カンボジア）

私たちの民話絵本は1993年、カンボジアで生まれました。ポル・ポト政権時代（1975～79年）に焚書政策によって本が焼かれ、作家や画家は「反政府思想を広める者」と殺害の対象になったカンボジア。内戦が終わっても、失ったものはすぐに取り戻せません。クメール語の本はほとんど失われ、強制移住により家族・村がバラバラにされて、年中行事や習慣など、民族の伝統を知らない子どもたちがいました。

「子どもにカンボジアの文化を知って欲しい。それもクメール語で」という思いから、土地の民話を聞き取り、看板描きの職人を捜して絵を描いてもらうことから始まり15年。今では民話のほかに民族の歌や踊り、建築などの伝統文化、環境や衛生のように幅広い題材を取り上げ、子どもたちに生きる知恵を伝えています。

現在は、ラオス、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ、アフガニスタンでも絵本出版が行われています。内戦、戦乱、貧困、国を追われた……それぞれ事情は異なりますが、自国の言葉で書かれた絵本を目にする機会が少ない地域です。

各国の民話絵本

アフガニスタン

『不誠実の結果』

3人の男がお金の入った巾着をひろいました。男はそれぞれ自分が独り占めしようと策を巡らせますが……悪意を持ったために最後は3人とも死んでしまい、お金だけが残ります。子どもたちに人気のある絵本です。（パシュトゥン語版）

『きれいでいることの大切さ』

なまけもので不潔な男の子は、友だちはもちろん、身の回りのものにさえ、嫌われます。しかし、お風呂に入り清潔にすると、皆が寄ってきます。衛生の大切さを教える絵本。服や靴、櫛が動き話すところがユーモラス。（パシュトゥン語版）

❶ 息子がツバメの巣を狙っているのを見つけて、サナムは怒り、息子のパチンコを取り上げて壊しました。

❷ 親ツバメは巣を守ってくれたサナムに感謝して、一家の幸運を祈りました。

❸ サナムはひろった薪を束ねて、その上に息子を座らせ、危険な山を降り始めました。

❹ 蛇が襲おうとしているのを知らず、サナムと息子は眠り続けています。それを見つけたツバメが二人を起こし、助けました。

❺ 美しい鳥は、「日頃の行いがあなたたちを救ったのですよ。親切心をこれからも忘れないでください」というと飛び去っていきました。

『サナムとツバメ』

サナムには一人の息子がいました。家のベランダにツバメが巣を作ったのを見て、子ツバメが欲しくなった息子は巣を落とそうとしました。それを見つけたサナムは息子を叱り、止めさせます。親ツバメはサナムにとても感謝して、一家の幸運を祈りました。ある日、薪を拾いに山に入ったサナム親子は寝込んでしまったところを、蛇にねらわれて…。（ダリ語版）

アフガニスタンでは、2003年から絵本の出版が始まりました。民話を長老から聞き取り、有識者がボランティアで参加している絵本出版委員会で内容を検討し、出版しています。

できあがった絵本は、まだ完成度が高いものではないかもしれません。しかしアフガニスタンの人びとが創意工夫をして「自分たちで作った絵本」です。自国の出版文化を創り上げていく道を歩みだしたのです。

絵本作家も育ちはじめ、2008年は9タイトルを出すまで成長し、累計42タイトルを出版しました。2006年からは公用語であるパシュトゥン語に加えてダリ語で出版しています。

カンボジア

『わたしのかわいい熊さん』

おじいさんが拾ってきた子グマはわたしの遊び仲間。おじいさんは森で狩りをしているけど、止めさせられないかしら。まごむすめが知恵を絞ります。2005年絵本コンクール入賞作品。

『ニアング・コングレイ山』

コンポンチュナン州には人が横たわっているような形の山があります。その山は巨人の娘であるニアング・コングレイが姿を変えたもの。地元に伝わる言い伝えを絵本にしました。

ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ

『きつねの家族』

子どもを授かったきつねの夫婦が暮らすのは、おそろしい虎のいる森の中。きつねたちは我が子を守るために一芝居をうちます。

「ウォー」と鳴く子ぎつねを見て、父きつねは「なぜ鳴いているんだい」と訊ねます。「虎を食べたいからよ」と答えた母きつね。その様子を見ていた虎はびっくり。恐れをなして逃げていきました。

難民のプー・ライ・シュイさんから聞き取った民話を基に作りました。

ラオス

『黄金の釜（ふ）』

村人から金を巻き上げる金持ちの男が、ある日、旅人を泊めます。魔法使いの旅人が持っていたのは、特別な釜。それを精霊のお堂の下においておくと一晩で中の黄金が増えました。男は欲を出して旅人を引きとめますが、彼は男をやりこめ、村人へ黄金を分け与えました。

釜は、ラオスで「家に富や幸せが入ってきますように」という願いとともに、新居を建てるときの縁起物でもあります。

カンボジアで民話絵本ができるまで

カンボジア事務所では、2008年までに、92タイトルの絵本と34タイトルの紙芝居を出版しました。

この経験の積み重ねは、出版のマニュアルとしてまとめられ、SVAが質の高い絵本を作り続けていく基礎となっています。

物語を選び絵本ができあがるまでの過程をご覧下さい。

1 民話の聞き取り

村の長老から民話を聞き取っているところ。カセットテープに録音したものをすべて文字に書き起しまとめる。

民話集からさがす

出版する民話は、仏教研究所と伝統文化委員会がまとめた『クメール民話集』、19世紀に出版された伝統民話集である『ガティローク』、仏陀の教えや道徳、孝行心を説いた『スレイヒットポテ』から選ぶことも多い。

2 絵本にする物語を決める

『カンボジア絵本出版委員会』は、クメール作家協会（カンボジアで唯一の作家協会）、画家、教育省が入っている委員会。この委員会と、SVAで絵本出版を担当するチャイ・ポリーが会議をしながら絵本にする物語を選んでいる。

「カンボジアの文化を残したい」ポリーも小さいころを難民キャンプで過ごした。

3 編集

1冊の絵本を、作家、画家、編集者4人が担当して製作する。民話の場合、物語の舞台となった土地に出向いて調査することも。

4 絵をつける

物語ができたら画家が絵つけ。調査の成果を基にして、画家が絵を描きおろす。

5 承認を受ける

絵本は公立の学校に配布するため教育省の承認が必要。承認番号を得ることによって、当会の出版物は教育省から保護され、また、品質を認められた証となる。

6 絵本の印刷

絵本はプノンペン市にあるカンボジア日本友好職業訓練センターの印刷部門で印刷される。この印刷所は仕上がりがキレイと評判がよい。印刷所の人材育成にもつながる

7 できあがり

森の中に住み魔法の力を持つ隠者や、賢いハトの主人など、ドキドキする絵本ができあがり。

8 絵本の研修

「図書館とおはなしに関する研修会」を開き、校長、教員、図書館員は絵本の使い方に関する理論や実践を学ぶ。謄写版の活用の方法と、折り紙などを使った教材作りなどの研修も行っている。

9 絵本を配布

研修会を受け、絵本の意義、読み聞かせの仕方を学んだ教員に絵本を配布している。

クロマーや、民話などクメールの伝統を伝える絵本。このような創作絵本と環境絵本も出版している。

10 子どもたちの手に

絵本は研修を受けた教員が小学校に持ち帰り図書室に。いよいよ子どもたちが絵本を手にするとき。

11 モニタリング

絵本が有効に使われているか、スタッフが学校を訪ねて調査する。必要なときは教員に助言も。

◎写真：瀬戸正夫（4・6・8）

すべての子どもたちに絵本を

カンボジア難民キャンプに届いた日本の絵本を読む子ども（1980年）
『かぞえてみよう』（講談社）

1980年、SVAはタイのカンボジア難民キャンプで図書館活動を開始しました。クメール語の絵本が手に入らなかったので、日本やタイの絵本にクメール語の訳を貼りキャンプに持っていきました。本を手にした子どもたちが一心不乱に声を出して読む姿を見た無着成恭師は「まるで、蚕が桑の葉をむしゃむしゃ食べているようだ」そう感じたそうです。生死の境を乗り越えて難民キャンプにたどり着いた子どもたちが、初めて触れる絵本の世界でした。

まもなく難民キャンプの中に印刷所を作って、難民の人たちの手で絵本を含むクメール語のいろいろな本を出版し始めました。それから12年間。カンボジアに和平が訪れ、難民の人々が祖国カンボジアに戻り、難民キャンプが閉鎖されるまでSVAの印刷所は100万冊を越える本を出版したのです。

1991年、SVAはカンボジア国内の教育・文化の復興のためにプノンペン市内の職業訓練センターに印刷所を建設し、出版や図書館活動を開始しました。当時は絵本もなく、学校図書館もほとんど普及していない状況でした。ポル・ポト政権下で行われた知識人の虐殺や焚書で壊滅的な打撃を被った出版文化はまだ復興していなかったのです。

それから18年、首都プノンペンには大きな書店もでき始め、SVA以外にも絵本を出版するNGOや民間の出版社も増え、年間30～40タイトルの絵本が出版されるようになりました。しかし全国に6000校ある小学校の半分以上の子どもたちは、まだ絵本を手にしたことがありません。

「すべての子どもたちに絵本を！」その実現をめざして、私たちは出版活動、図書館活動を続けていきたいと思っています。

（カンボジア事務所　手束耕治）

①カオイダン難民キャンプ図書館（1981年）
②③難民キャンプの中に印刷所を作って、
難民の人たちの手で絵本を含むクメール語の本を印刷した（1986年）
④⑤現在の図書室の様子

民話絵本ができてから

図書館活動はSVAの核となる活動です。読み聞かせ、伝統楽器舞踊教室、「子どもの日」、お祭り、教員向けの研修など、さまざまな活動がSVAの図書館では行われています。紹介した絵本の出版もそのひとつです。

置かれている環境によって、子どもたちに必要なものは異なっており、各国事務所ではその状況に合わせた活動を考え、運営しています。

子どもに読書の習慣がつくのは図書館活動の大きな成果です。本を通して子どもと文化がつながり、本が世界と可能性を広げてくれるからです。

SVAの図書館で図書館員は大切な役割を果たします。子どもが物語の世界に入る手助けをするからです。図書館が単に本が並んでいるだけの空間だとしたら、子どもには本の魅力は伝わらないでしょう。いつも一冊の絵本の喜怒哀楽を共有できる人(図書館員)がいることで、本の世界がより膨らみ、子どもの心の奥深くに届けられます。新しい本との出会いを一人一人の子どもに示すことができるのも、成長を見守る図書館員がいてこそです。

民話絵本ができあがったあと、どうするのでしょうか。配って終わり……?いいえ、SVAでは「絵本が使われること」をいちばん大切にしているので、その先の活動が肝心なのです。

図書館員が子どもとの接し方や読み聞かせの意義を理解していないと、図書館の利用者が減ったり、子どもが読書嫌いになることすらあります。本との出会いが子どもにとって喜びであるよう、SVAは研修など、図書館員の成長を助けることに努めています。

● 子どもが本と出会う場所。本が見やすい、居心地のよい雰囲気作りも大切。
図書スペースがない学校・地域には、移動図書館車、図書箱を巡回させて、子どもが本に触れられるようにしている。

■ 図書館員との触れあいで、「聞く力」「話す力」「読む力」「書く力」を段階的につけていく。読み手の成長に応じた本が図書館にあることが望まれる。

● 図書館活動の成功の鍵をにぎる人。
読み聞かせの技術のほか、本の整理管理やお絵かき工作などの知識も必要なので、人材を育てる研修会をおこなうことが不可欠とSVAは考えている。

● 数が多くあることも必要だが、子どもの心を育てる内容、バリエーションがあることも大事。
現地で出版された民話絵本、「絵本を届ける運動」を通じて日本から届けられた絵本、タイのように商業出版されていれば購入した本をおいている。

◎写真：瀬戸正夫

SVAの図書館事業の使命

SVAの図書館活動は、子どもの教育を受ける権利と文化を継承する権利を前提として、子どもの価値、態度、知識を発達させることを目的にしており、第一義的な対象を「困難な状況に置かれている子ども達」と規定し、また、それは青少年、父母、教員、図書館員、その他の子どもに関わる人々をも含める。

その手法は、具体的にはおはなし及び文化・文芸活動、子どもに関わる教育者対象のトレーニング、常設図書館の建設、常設図書館の運営、「よい本」の出版、そしてそれらの活動と他の社会資源とのネットワークづくりなどで構成された「読書(習慣)推進プログラム」である。

この使命文は、2001年タイのバンコクで開かれた「図書館事業モデル形成会議」にて、会議の参加者(SVA東京、海外事務所の図書館事業調整員、所長ら31人)によって話しあわれ、合意したもので、SVAの図書館活動の指針となっています。

希望の種まく図書館

なぜ絵本が国際協力になるのか?ミャンマー(ビルマ)難民キャンプの図書館事業スタッフだった渡辺さんが、言葉と感性を育む大切さを伝えてくれます。

①③④写真：渡辺有理子
②中央が筆者。ウンピアム難民キャンプ図書館でスタッフが送別会を開いてくれた。

「えっ!1ページずつ現地の言葉に訳して絵本に貼りつけるですって?!」

そう驚嘆されたのは、2007年夏に南アフリカで開催された国際図書館連盟(IFLA)の世界大会で、SVAの図書館活動について報告をしたときのことでした。コンピュータの普及により、最先端の技術を活かした図書館の事例報告が相次ぐなか、SVAの活動はとりわけ泥臭く、異彩を放って受けとめられたのでしょう。聴衆の一人、南アの少数民族の女性は「母語を失ってしまったら、民族の証しを失うも同然です。SVAが母語で図書館活動をしているということは、実に意味があることですよ!」と目をうるませていました。私はその女性の姿が「子どもたちには、けしてカレンの言葉(母語)を忘れてほしくない」と話していた、ビルマ(ミャンマー)難民キャンプの親たちの姿と重なり、現地で仕事をしていた日々が蘇る思いでした。

子どもたちが自分たちの言葉、母語で絵本が読める環境を提供しつづけるSVAの図書館活動。合理的で迅速に物事を処理してゆくことが優先される現代で、図書館活動を支えているのは、時間をかけた〝人と人とのつながり〟に他ならないでしょう。日本人スタッフ、現地スタッフ、多くの支援者という複数の糸が織り込まれた手作り工房的図書館活動だからこそ、今ではそれぞれの活動地域に根をはり、自宅の延長のような親近感と安心感を人々にもたらすことができているのだと思います。

図書館で絵本を楽しむうちに、子どもたちの母語は目に見えて豊かになり、図書館で聞いた楽しいお話を家庭で披露する子が増えていきました。絵本の中で出会う新しい言葉の数々は、子どもたちの知る喜びを刺激し、想像の世界は〝こんなことしてみたい!こんな人になりたい!〟という無限の夢を抱かせます。こうして子どもたちが生き生きと希望を持ってすごす姿は、地域で暮らす大人たちにもどれほど活気をもたらすことになったでしょう。SVAの図書館は子どものみならず、子どもたちのよりよい未来を願う大人たちにとっても、希望を共有できる空間です。

図書館の支援は、食料や医療のように緊急に必要な支援ではないかもしれません。しかし、図書館は困難な状況にある人々が〝けして失いたくない!〟と願う母語の誇り、伝統や文化を守り、次世代に受け渡していくことのできるかけがえのない場所です。そこで多くの絵本に出会った子どもたちは、豊かな感性と創造力を培い、一人一人の成長過程の折々で、心の中の種を発芽させ、その芽をのばし、多彩な色の花を咲かせてくれることでしょう。

私は強く信じています。こうした子どもたちが、地球にとってシャンティ(平和)な輪を広げてくれる大人に育つことを。

渡辺有理子(わたなべ・ゆりこ)
東京都出身。2000年から3年間、ミャンマー(ビルマ)難民キャンプSVA図書館事業の立ち上げに携わる。帰国後は在日カレンの人たちとの交流を通じ、国境のことに関わり続けている。現在は本業の学校司書に復帰。

●渡辺さんのキャンプでの活動・生活を知りたい方はこちら

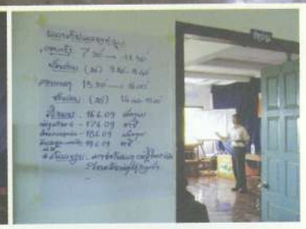
『図書館への道 ~ビルマ難民キャンプでの1095日』渡辺有理子(すずき出版)

この本は、SVAでも取り扱っています。広報担当清野(TEL03-6457-4586)まで。

※このページでは筆者の意向を尊重して国名を「ビルマ(ミャンマー)」と表記しています。

SVA活動報告
activity reports

ラオス
Laos
◆
図書箱配布研修会



上：児童の前で読み聞かせの演習をする教員
右：研修の日程表とミンチェン（愛称。本名サイサモン・キアオトンクン）スタッフ
左：講義をするカムコン・クンチャムヌーンスタッフ

顔の前で手を振る教員たちの姿がやけに目についたので、「ん？会場が臭いのかな？」と思いながら近寄ってみると、教員たちは手を振りながら「ムリムリ。子どもたちの前で、そんな風にはできないな～俺、男だよ」「無理よぉ～。私、そんな大きな声なんて出せないもの」と口々に感想を言っていたのでした。図書箱配布研修会で、ミンチェンスタッフが絵本の読み聞かせの実演を教員たちに見せたときのことです。

6月、ラオス事務所ではNGO連携支援無償資金を受けて、ラオス南部に位置するサラワン県で図書箱配布とそれに伴う研修会を実施しました。教科書さえ満足に配布されていないこの土地で、教員や子どもたちが図書を目にすることは稀で、カムコンスタッフや国立図書館のラソーイさんから受ける図書に関する講義や、ミンチェンが実演する読み聞かせを見るのは初めての教員ばかりです。

じっくり3日間かけてあらゆる角度から図書の大切さを伝え、特に南部に多いラオス語を理解することが難しい少数民族の子どもたちにとって、絵本はラオス語に興味を持つための良いきっかけになる事を伝えました。長い時間をかけて、じわじわと、こちら側の気持ちが教員たちにも通じたようでした。

最終日に児童の前で読み聞かせ演習をした後には、カムコンとミンチェンは多くの教員たちに取り囲まれ質問攻めにあうほどになりました。ラオス事務所が行なう読書推進事業、着実に全国に広がっています。

（鈴木淳子）

カンボジア
Cambodia
◆
お寺と村の協力による自然保護活動

「苗木とともに成長します」と誓うソペアック師

スパイリエン州では、お寺の境内で育てた若木を、僧侶と村人が協力して道や用水路に沿って植える自然保護活動が定着してきています。自然にやさしく有益な木――たとえば果実がなる木、影を作る木、薬がとれる木、建設資材や家具に使える木などを育てるため、SVAでも種を集めたり苗床を維持管理する指導やお手伝いをしています。

今年は5月29日に「自然環境と生物多様性の保護についての研修会」を僧侶の代表、近隣の村長、小・中学校の校長を対象に開催し、次の世代のために自然を残していく重要性を学んでもらいました。それをさらに実践する機会として、7月26日に用水路沿い約11kmに渡って植林作業を行いました。

植林作業に参加したポン・ライ寺の若い僧侶、ポン・ソペアック師はこう語ってくれました。「私は2007年に出家し、僧侶になって2年、この若木も芽が出て2年です。この木が立派に大きく育つのを見守り、私自身もそれに負けずに立派な僧侶になるため修業を積みます。そしてこれからも、カンボジアがもっともっと緑豊かな素晴らしい国になることを夢見て木を育て続けていきます」

人が自然を育て、自然が人を育てる、そんな関係を築いていくお手伝いをこれからも続けていきたいと思います。

（磯部正広）

※この活動は、お寺を中心にコミュニティの結びつきを再生し、地域の問題に取り組むことを目指す活動の一環です。

タイ
Thailand
◆
パヤオ県のシャンティ学生寮

寮生が自分たちで米も育てている

現在タイでは12年間（小学校6年、中学校3年、高等学校3年）の義務教育を無料で受けられることが保障されています。しかし、教育省の予算では学校運営をまかなえないため、足りない費用の負担が保護者に求められており、貧困層の家庭にとって大きな負担になっています。都市部と地方では教育の質と機会には格差がみられています。

SVAタイランドでは貧困や自宅が学校から遠いなど、厳しい環境の子どもに奨学金を支援しています。

シャンティ学生寮には、現在、中・高校生46人が共同生活をおくりながら、地元の学校に通学しています。寮生は、地元のパヤオ県に隣接する、ナーン県、チェンラーイ県、チャンマイ県の山岳地帯の出身で、モン族を中心に、アカ族、リス族、タイヤイ族の子どもです。

寮生による自治会によって自立的な運営を行い、農業を通じできるだけ自給自足を目指しています。他団体との合同キャンプや運動会などのイベントを行い、同年代の学生とのネットワークを作り、将来のリーダーを育成しています。タイで最難校の一つタマサート大学、チャンマイ大学を卒業しタイ社会で活躍している卒業生もいます。

5月から新入生を迎えての新しい生活がスタートしています。

（八木澤克昌）

ミャンマー（ビルマ）難民
Myanmar(Burma) Refugee Camps
◆
緊急対応の図書館活動

ノンブア寺院で折り紙をするカレン族の子どもたち

6月初旬、ミャンマー国軍がカレン軍の支配地域に侵攻、新たに大量の難民が発生しました。タイ西北部ターク県ターソンヤン郡に流入した数は3000とも4000とも言われています。来年に予定された国内総選挙前の反政府勢力の掃討作戦とする見方もありますが、はっきりとした真相はつかめていません。

SVAでは、6月20日「世界難民の日」から4週間、移動図書館活動を実施しました。難民避難所のひとつ、ノンブア寺院ではおはなし、ゲーム、塗り絵などを行い、絵本を配架。2週目にはシーカーアジア財団による人形劇も特別上演しました。200人の子どもたちは元気を回復、大きな歓声を上げていました。また、最後の2週間はノンブア寺院より北のメコキ村に避難したリクルヨー学校の生徒・教員約120人を訪問し、同様の活動を行いました。

新難民は帰還を待っていますが、治安はまったく回復していません。ターソンヤン郡事務所、UNHCR、NGOは調整会議と物資配給を継続中。最近では衣食住に続き、教育ニーズが検討されています。SVAも他のNGOと協力しつつ、子どもたちの様子を見守っていきます。

（小野豪大）

アフガニスタン
Afghanistan
◆
子ども図書館で「国際女性の日」

女性の権利についての歌を披露した

SVAが支援しているジャララバード市の子ども図書館では、3月11日に「国際女性の日」を祝う行事が行われ、女子65人を含む125人の子どもが参加しました。（国連が定めている国際女性の日は3月8日）

子どもたちが、この日のために練習してきた、女性の権利や地位についての歌や劇、詩を披露しました。踊りやゲーム、スタッフによる人形劇を楽しむとともに、女性の社会参加や権利について学びました。

女性の日は、国際社会からの後押しもあって、カルザイ大統領も出席する、女性差別撤廃を訴える式典があるなど、国全体で祝われる大きなイベントです。また、男性が女性にプレゼントやカードを贈る日にもなっており、ほんわかムードもただよいます。

子ども図書館は、SVAの図書館活動の意義を教員に理解してもらうとともに、アフガンにおける図書館活動の有効な方法や子どもに人気のある絵本を見出すために、2003年に開館されました。現在は、学校に行けない子どもたちのための識字教室や縫製教室も開かれており、毎日100人の子どもが通ってきます。2000冊の本があり、読み聞かせや工作、ゲームなどの子ども中心の活動が行われています。また、女性の日やアフガンの祝日などの重要な日にちなんだ行事が毎月開かれています。

（三宅隆史）

日本
Japan

代議員研修会が開かれました

「代議員としてなにができる？」グループ発表

ワークショップではグループごとに会話が弾んだ

6月20日、「SVAを知り、SVAの代議員を知り、SVAの明日を語ろう！」と題して、連合東京（東京都港区）で代議員研修会が行われました。

代議員16人、理事8人、スタッフ12人の36人が参加して、午前はSVAの役割と事業について説明を受け、代議員でもある田中治彦さんを講師に「援助する前に考えよう」というワークショップを行いました。

午後は、まず代議員3人が活動を紹介。私は「防災寺子屋」を開催したことにより、SVAの名前・活動などを地域の方に知っていただきました。また、「長崎市総合計画・市民の暮らしを豊かにするために」統括部の委員として、地域社会に一僧侶としてではなくSVAとして参加し、地域防災・平和・人権問題について関わっております。地域での取り組み方は様々でも、共有の場の広がりを実感しています。

ワークショップ「代議員としてなにができる?」では、情報の共有、気づき、取り組み方など、代議員同士のキャッチボール＝集いが必要だ！との意見が多く見られました。初めて代議員に就任した方からも、まずは自分たちで、地域でできることから始めたいとの心強い言葉が出ました。

地域でのメディアへの広報・クラフトの販促・募金・モニタリングツアーなど、地域から日本、地域から世界へとつなげて行こう！

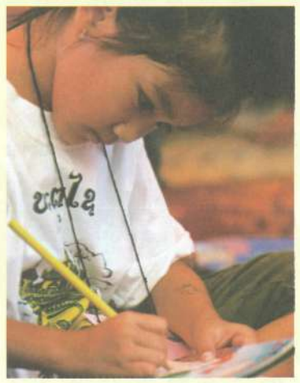
研修会での決定をふまえ、代議員のメーリングリストを始めて2ヵ月が過ぎました。8月は地震や水害が相次ぎましたが、被災地の様子などニュースでは見られない情報が得られました。また、代議員それぞれ支援している国が違うことが多く、何をしているのか、どんな様子なのか、メールの内容がヒントになると感じています。些細と思われることでも、読み手から見ると「なるほど」と気づくことがあり、意識が変わっていくと感じるので、年に1～2度の研修会とあわせて、それぞれの体験を共有できるメーリングリストのさらなる活用を願っています。

開催にあたり発起人のみなさんと事務局に感謝申し上げます。

（代議員　長崎市在住　松尾哲雄）

発表する筆者

チャイルド・ブック・サポーター



図書館で絵を描いているラオスの子（写真：瀬戸正夫）

毎月2000円でSVAの図書館の運営をサポートする「チャイルド・ブック・サポーター」も5年目を迎えました。

「図書館を通して教育を支援する」という趣旨に共感し、サポーターになってくださっている方は、本に関わる仕事をされている方や、本好きな方が多いです。「書店で営業をやっています。素晴らしい活動だと思います」と、23歳の女性。

30歳代の女性の割合が高く、男女比は女性が6割を占めています。小学生から80代の方までご登録いただいていますが、平均年齢は40代前半です。

サポーターの皆さんから折にふれて届くお便りからは、支援先の子どもたちをいつも考えてくださっていることが分かり、嬉しく思っています。サポーター歴4年目の愛知県の女性は、「食卓に、SVAから以前にお送りいただいた写真（図書館で絵を描いている女の子）を置いています。以来、なにかと彼女のその光景がへこんだ時の私を励ましてくれています。」とお手紙をくださいました。累積の登録者は700名を超えました。現在のご支援口数も800口に迫っています。

支援先の子どもたちは、日本の私たちをどのように思い描いているのでしょう。図書館で時を過ごしながら、世界がつながっていることを感じてくれているでしょうか。これからも海の向こうの子どもたちとサポーターの間に、たくさんの虹がかかることを願い、新しいサポーターを募ってまいります。

（チャイルド・ブック・サポーター　担当　佐藤亨子）

TOPICS

日本各地での活動やニュースをご紹介します

「段ボール箱に本を立てて入れる場合は、背表紙側を下に入れてください。逆にすると運送中に本が広がってしまい、破れや折れの原因になります」（BOOKOFF担当者）

書店ではカバーをかけてもらわないという方は、「クラフト・エイド」のブックカバー（1500円）をぜひどうぞ。

リサイクル・ブック・エイドからのお礼とお願い

本は意外にか弱いのです

2009年前半、リサイクル・ブック・エイドには、段ボール約1,300箱、6万4,000点近い本やCD類が集まりました（6月30日時点）。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

ただ、BOOKOFFの査定で値段が付かなかったものも多数ありました。BOOKOFFの宅本便センターに届くまでに、本が破れたり歪んだりして、価値が下がるケースも多いのです。これを少しでも避けるために、「本を詰める段ボール箱に隙間ができたら、緩衝材を入れてください」とは、BOOKOFFからのアドバイスです。

個人のお申込者の中で、今年362点をお送りくださり、その内361点に値段が付いたKさんは、本をていねいに扱う大切さをアピール。「書店でカバーをかけてもらったら、カバーを付けたまま読んで、そのまま送っています」（Kさん）。確かにこれなら新品同様のまま査定が受けられそうです。

みなさまの善意が少しでも活かされるよう、本が傷まないアイディアがありましたら、ぜひお聞かせください。来年は10年目を迎えます。今後とも、リサイクル・ブック・エイドをよろしくお願いいたします。

（担当　古賀東彦）

査定に関しては、SVAのホームページでもご案内しています。
http://www.sva.or.jp/bookaid

社員と家族が社会貢献に協力 大塚商会株式会社

8月1日、本社（東京都千代田区）での「社会貢献デー」、SVAはクラフト・エイドの販売、活動紹介ビデオの上映、「リサイクル・ブック・エイド」で参加いたしました。夏休みとあって、社員とその家族500人以上の参加者から、古本など351点もご協力いただきました。

担当の藤田晶英さん（社会貢献委員会事務局）から「今回初めて外部団体に出展いただきましたが、社会貢献を実感できたと好評でした」との声をいただきました。

2階ロビーでクラフト販売する亀井・佐藤スタッフ

カンボジアへ絵本を届けよう 舞鶴市の小学校の取り組み

児童数33人の舞鶴市立岡田上小学校5・6年生9人が絵本を届ける運動に参加しました。SVA会員の掃部克重さんが参加をよびかけて実現したものです。「人に優しく」をテーマに「総合学習」の時間にビデオでカンボジアの生活を学び、絵本25冊に訳文を貼りました。全校集会・地域の方を招いた発表会で、カンボジアの子どもの生活や絵本の作り方、クメール語で書いた自分の名前を発表し、取り組みを広めました。

「私たちが手伝った絵本を読むんだね」
「心をこめてていねいに作ろうね」

楽しみながら「健康と笑いとボランティア」

7月5日、広島県呉市の神應院で「アジア祭り」が開かれました。神應院のボランティア活動とインドシナに理解を深め、関心を持つきっかけにと毎年行われている行事です。今年のテーマは「健康と笑いとボランティア」。総代の井之川義典医師の「腰痛講座」、桂平治師匠のチャリティ寄席、「絵本を届ける運動」の訳文シール貼りの3本立て。参加者が協力し合いひとつの行事を作り上げていくことで結束が生まれ、お寺に対する愛着も生まれてきています。

（神應院菩提樹の会　西村信恵）

「ボランティア講座」では神應院菩提樹の会員が貼り方をアドバイス

シャンティ
2009年10月1日発行（1、4、7、10月1日発行）通巻253号
1985年6月28日第三種郵便物認可

information & event

鎌倉の名刹・建長寺で「チャリティ寄席」！

鎌倉の名刹・建長寺を会場として「チャリティ寄席＆仏像ガールチャリティトーク in 建長寺」を行います。桂歌若師匠の落語、仏像ガールこと廣瀬郁実さんのトークショーでお楽しみ下さい。どなたでもご参加いただけます。お誘いあわせのうえ、風薫る秋の鎌倉にぜひお越しください。

◎日時：10月12日（月・祝日）　14:00開演

※夏号で13:30開演とお知らせしましたが、変更となりました。

◎参加費

会員およびチャイルド・ブック・サポーター……500円

一般……1000円

※参加費のほか、建長寺拝観料300円がかかります。

◎会場：建長寺龍王殿（神奈川県鎌倉市山ノ内八番地）

◎申込：広報担当・亀井（TEL03-6457-4585）までご予約ください。

※10月10～11日、事務所はお休みです。予約のお電話が通じない場合は直接会場にて受付いたします。

担当◎国内事業課　宗教部門担当　大菅俊幸・自覚大道

「代議員会」と「SVAの日のつどい」

●「2009年度通常代議員会」

12月12日（土）に開催します。

主な議題は2010年度事業計画案と予算案についてです。代議員の方々には、後日ご案内と資料とお送りいたします。

●「SVAの日のつどい」

12月12日（土）代議員会終了後に開催します。

先達を偲び、永年会員の顕彰、講演などを行います。会員のみなさまも交流の機会としてぜひご参加下さい。詳しくは同封のチラシをご覧ください。

1981年12月10日にSVA設立総会を開催したことにちなんで、12月10日を「SVAの日」と定めました。

担当◎経理・総務課　市川斉・河口尚子

会員のご継続をお願いいたします

会員のみなさまの会費の期限が、同封の払込取扱票に記載されていることにお気づきでしょうか？

会費はSVAの活動を支える大切なお金です。期限がもうすぐという方、過ぎてしまったという方はぜひ継続のお手続きをお願いいたします。毎月1000円から口座振替もご利用いただけますので、詳細はお問い合わせください。

担当◎国内事業課　佐藤宣子

SVAからのお知らせ

「タイキャラバン募金」にご協力下さい

バンコクだけを見ていると、タイは経済発展が進んでいるように見えますが、スラム地域や北部では、子どもたちが高い教育を受けられる機会は少なく、学校に行けないケースもあります。家庭でいろいろな問題を抱えているため、子どもたちの教育まで目が届かない親もいます。

このような事情がある子どもたちに、図書貸し出しや、絵本の読み聞かせ、歌・踊りなどの行事を行うことによって、学習の機会をつくり、識字活動をすすめるために、SVAは移動図書館活動、図書館運営をしています。本が高価で買えない子どもたちに、読書や読み聞かせを通じて情操教育の機会を提供しています。また、メディアの普及でタイの都市部では本に接する機会や、伝統文化に接する機会が減っており、そんな子どもたちのために有効です。

これらの活動は、学校建設や、絵本出版のように形に残る活動ではないため、ご支援が集まりにくい状況です。このように何年も継続していく、地道な活動も大切にしていきたいと思っています。ぜひご協力をお願いいたします。

※同封の郵便払込取扱票で郵便局の窓口からお振り込みいただけます。

担当◎海外事業課タイ担当　神崎愛子

右：スタッフと絵本を読む子ども
下：毎回待ち遠しい移動図書館！

「タイキャラバン募金」とは、タイ国内での移動図書館活動、図書館運営や行事などの運営費にあてられる募金です。

スタッフのひとこと「おすすめの本」

■『幸せへの切なる願い』（マックス・アーマン）詩集に興味はあってもなかなか手が伸びないという方に。堅苦しい言い回しや思想的な表現もなく、題名どおり幸せへのヒントがわかりやすい言葉で綴られていて読みやすい作品です。（経理担当　野口早苗）

■『徒然草』つれづれなるまま、即ち、何もする事の無い所在なさから、心に浮かぶとりとめの無い事を延々と書いてゆきます。格調高い話もあれば、中には旅の醍醐味や、ある人が酒宴で失敗した話など、ネタは様々。著者の吉田兼好は、現代を生きていたらきっとブログを書いていたことでしょう。（絵本を届ける運動担当　北嶋友一）

■『武士道～ノーブレス・オブリージュとは』（李登輝）日本をこよなく愛する前台湾総統の李登輝氏が、戦後64年間ですっかり大和魂を失ってしまった我々日本人に、檄を飛ばしてくれた一冊。私の人生のバイブルです。（緊急救援担当　薄木浩一郎）

■ユーモアのある語り口と料理がうまい玉村豊男のエッセイ。『パリ雑学ノート』『男子厨房学入門』もいいけれど、40歳を過ぎてから絵描きになった、その生活を真摯に書いた『絵を描く日常』がイチオシです。（シャンティ編集担当　清野陽子）

社団法人
シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015
東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL　03－5360－1233
FAX　03－5360－1220
WEB　http://www.sva.or.jp
E-Mail　info@sva.or.jp
郵便振替 00150－9－61724

● 当会へのご寄付は、所得税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

「シャンティ」は、FSC森林認証紙（SGS-COC-001773）にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。

発行所　社団法人シャンティ国際ボランティア会
発行人　若林恭英　／　編集人　関尚士
装丁・レイアウト　矢萩多聞　／　印刷　株式会社大川印刷

定価 550円（税込）